国立民族学博物館
創刊昭52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和2年2月1日発行　第44巻第2号通巻第509号

# 月刊みんぱく

2020 2月号

特集

## 朝枝利男とガラパゴス

一九三〇年代ガラパゴスの旅　丹羽典生
ガラパゴス研究史におけるクロッカー調査隊と朝枝利男　伊藤秀三
フロレアナ島のドイツ人　新木秀和
朝枝利男とテンプルトン・クロッカー　ピーター・J・マシウス

# 古生物復元画と博物館

小田 隆

古生物復元画と書いて、すぐに何かをイメージできる人は少ないだろう。でも、博物館などに展示されている恐竜やマンモスの絵のことだと説明すれば、多くの人はすぐにその内容をイメージすることができるのではないだろうか。ではそれらがどういう過程を経て作られているか？という問いに正確に答えられる人は、博物館関係者でも少ないかもしれない。

古生物は絶滅した生物なので、現在、生きている姿を観察して描くことはできない。しかし、それらは全て地球上に生息していた生物だ。過去の地球環境は時代によって大きく変化をしているし、絶滅してしまった系統関係もあるが、大きな意味で現生種につながる系譜と言える。

脊椎動物の場合、化石として残るのは主に骨だ。全ての部位が発見されることは稀で、多くの場合、部分から全身を復元しなくてはならない。そして、筋組織、脂肪、皮膚などを検討していく。また、全ての過程において研究者との共同作業は、最も重要な要素である。現在の細分化された研究領域では、複数の研究者と仕事をすることも多い。環境も含めて当時の世界を描写した生態環境復元画となると、さらに古植物や堆積学、無脊椎動物などの研究者も加わることとなる。

復元において活用される、もうひとつ重要な研究領域に美術解剖学がある。美術解剖学は現生種のヒトや動物の内部構造を知ることで、よりリアリティのある豊かな表現を目指すものだ。絵画、彫刻だけでなく、アニメ、漫画、イラストレーションにも応用されることがある。生きた生物の内部構造を知り理解することと、化石しか存在しない古生物の姿を思い描くことは、復元という作業において外すことのできない両輪であると私は考えている。

筋肉には起始と停止がある。起始とはその筋肉の支点となる部分、停止とはその筋肉の収縮によって動かされる部分のことである。これらを復元された骨格図のなかに見つけていくことで、筋肉の復元を行うことができる。稀に発見される鱗や羽毛の化石から体表を復元できることもあるが、近い系統にある現生種との比較から皮膚を復元することのほうが多い。しかし、どこまでいっても、確実で正確な姿を復元することは難しく、想像の域を出ないというのが事実である。それでも日々、更新される発見と新たな知見から、すこしでも真実に近づきたいと考えている。

プロフィール
1969年三重県生まれ。画家、イラストレーター、大学教員。東京藝術大学美術研究科修士課程修了。恐竜の化石の組み立てに参加したことから、復元画の制作を始める。個展やグループ展を開催し、博物館のグラフィック展示、図鑑の復元画、絵本など制作物も多数。幅広い古生物学者たちと交流を重ねながら、科学的に調査された資料をもとに、オリジナリティに富んだ作品群を生みだしている。著書には『うつくしい美術解剖図』（玄光社）などがある。

月刊 みんぱく
2月号目次

1 エッセイ　千字文
古生物復元画と博物館
小田 隆

特集　朝枝利男とガラパゴス

2 1930年代ガラパゴスの旅
——写真家朝枝利男の見たもの
丹羽 典生

4 ガラパゴス研究史における
クロッカー調査隊と朝枝利男
伊藤 秀三

6 フロレアナ島のドイツ人
——ガラパゴス事件をめぐって
新木 秀和

8 朝枝利男とテンプルトン・クロッカー
——芸術と科学の旅
ピーター・J・マシウス

10 ○○してみました世界のフィールド
ロープウエーで天空の街をめぐる
吉江 貴文

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
ウリヤンハイのシャマンの依り代
ショムファイ・ダーヴィド

16 みんぱく回遊
みんぱくで大西洋奴隷交易に触れる
鈴木 英明

18 シネ倶楽部 M
神の言葉に耳をすます
——「シャルギー（東洋人）」
相島 葉月

20 ことばの迷い道
エジプトの IBM
末森 薫

21 次号予告・編集後記

特集

# 朝枝利男とガラパゴス

一九三二年、ガラパゴス諸島に調査隊の一員として訪れた唯一の日本人、朝枝利男。動植物や自然、そこで出会った人物の写真を撮影するほか、生物については絵画に残すなど画家としての才能も発揮した。本特集では、民博が所蔵する朝枝コレクションを中心に、彼が見たガラパゴスを紹介する。

コレクション展示

**朝枝利男の見たガラパゴス**

――1930年代の博物学調査と展示

会期｜3月24日（火）まで　場所｜本館企画展示場内

## 一九三〇年代ガラパゴスの旅

### ――写真家朝枝利男の見たもの

丹羽典生
民博 学術資源研究開発センター

本特集では、朝枝利男とガラパゴスについて取り上げる。ガラパゴスについての説明は不要であろう。イギリスのチャールズ・ダーウィンを乗せたビーグル号の探検がなされてからは、進化論の代名詞ともなっている島々だ。その独特な自然環境からイグアナやゾウガメまでの特徴的な動物の生態は、特に生物に関心がない方でもどこかで目にしたり、耳にしたりしたことがあるはずである。

一方で朝枝はどうであろうか。彼は今の日本ではほぼ無名といって差し支えなかろう。ところが彼は日本人でおそらく最初期にガラパゴスへの科学的調査隊に参加した人物なのである。朝枝は多彩な技術をもちさまざまな仕事を請け負っているが、アメリカで活動したカメラマン・博物館学芸員と、とりあえずいえる。彼が調査のために足を踏み入れた国は数多く、一九三〇年代の太平洋を縦横無尽に駆け抜けた。メラネシアのフィジー、ソロモン諸島、ポリネシアのサモア、トンガ、フランス領ポリネシア（タヒチ、マルケサス）、ニウエ、ハワイ諸島、ラパヌイ（イースター島）、ミクロネシアのキリバスにまでおよんでいる。

さらに珍しいところでは、戦艦バウンティ号の反乱で有名なピトケアンにも足を運んでいる。ピトケアンは太平洋上の英領で、ブライ船長に反旗を翻したヨーロッパの船乗りが、一七九〇年にタヒチ人を連れて国をつくったことで広く知られている。過去の出来事のようだが、ピトケアンは今でもバウンティ号の反乱者の子孫からなる島である。

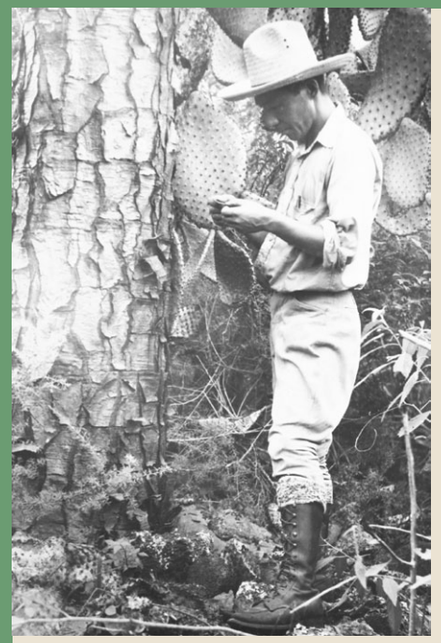
**時代を映した写真と絵画**

現在開催中のコレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス――一九三〇年代の博物学調査と展示」では、このように太平洋諸社会を広く見聞した朝枝の探検のなかでもガラパゴス諸島探検について焦点を当てている。

朝枝は、一九三二年と一九三五年の二回ガラパゴスを訪問している。前者はカリフォルニア科学アカデミーによる、後者はアメリカ自然史博物館による探検隊員としてである。いずれもアメリカのカリフォルニア州在住の富豪であったテンプルトン・クロッカーが科学的探検のために建造・使用したザカ号に乗船している。

探検では鳥類を中心として各種の動植物が博物館の展示のために収集された。探検隊での朝枝の役割はカメラマン兼画家であった。彼はガラパゴスの動植物と、それらが採集されて標本資料が作成されるまでを撮影記録している。未踏の地であったクロッカー山の頂で撮影された写真は、ひとつのハイライトであろう。またガラパゴスの自然に囲まれた生活にあこがれて移住していた――そして後には「ガラパゴスの怪奇な事件」として知られる失踪・死亡事件に巻き込まれることになる――ドイツ人のカップルとの出会いもあった。朝枝によって撮影された彼らの幸せそうな写真もひとつの時代を切り取っている。

探検隊員としての彼の業務のなかで、もうひとつ重要だったのは絵画の作成だ。まだカラー写真が一般化していなかった時代、生きた魚の色を記録に残すためにも水彩画は貴重な手段であった。魚類の標本画まで作成していた朝枝の水彩画は、今の目で見ても色鮮やかで写真よりも見事である。これらの絵画の多くは、本館とカリフォルニア科学アカデミーに収蔵されている。今回の展示が、おそらく本邦で初公開となったであろう。子ども時代にかかる冒険熱が治癒することなく長じて夢を実現させた朝枝利男。そんな彼の手によって撮影された写真と描かれた美しい絵画をぜひ堪能していただきたい。



ウチワサボテンを調査中の朝枝（X0076059、サンタ・クルス島アカデミー湾、1932年）

ウミイグアナ（X0076044、サンタ・クルス島アカデミー湾、1932年）

クロッカー山への登頂（X0076083、サンタ・クルス島、1932年）
（本特集および表紙に掲載しているX00から始まる写真はすべて朝枝コレクション）

朝枝が描いた魚類の水彩画（本館所蔵）

# ガラパゴス研究史における クロッカー調査隊と朝枝利男

伊藤（いとう） 秀三（しゅうぞう）
長崎大学名誉教授

**探検ラッシュ**

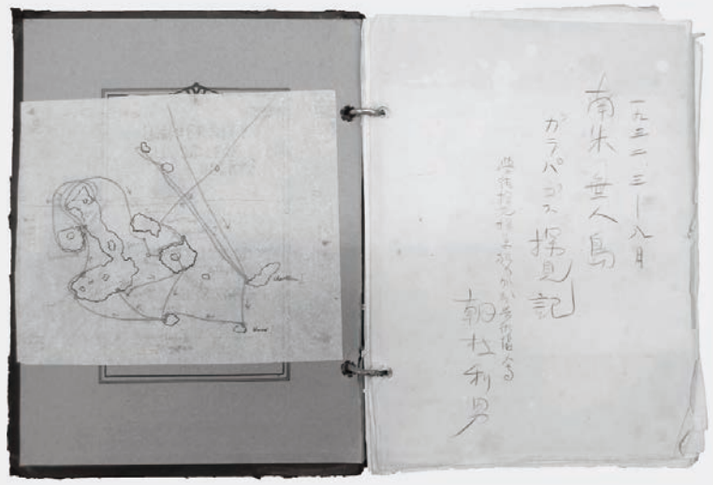
「ガラパゴスは太平洋のかなたにある」という書き出しで、わたしは何度か稿を草した。かつて博物学者ウィリアム・ビーブはそこを「世界の果て」とよんだ。そのガラパゴスは二〇世紀前半、探検ラッシュの時代を迎えた。一九四〇年までに六つの探検隊が来ている。そのなかで最大の学術探検は、カリフォルニア科学アカデミーが派遣した、探検船を一年間もガラパゴスの海で行動させたというものであった。この長期探検により、同アカデミーは採集物（石や各種の動植物）の収蔵で、量、質ともに世界最大となったし、今もそうである。ちなみに、同アカデミーは科学博物館のような組織で、地学動植物のほかに天体部門もあり、各部門には研究員がいて、来訪者向けの標本展示や解説パネルもある。

**テンプルトン・クロッカー探検隊**

一九三二年に同アカデミーが派遣した二度目の探検隊が、ヨット・ザカ号のテンプルトン・クロッカー探検隊で、四月中旬から六月中旬にかけて二カ月間、一三島を探検した。朝枝利男はその探検隊員の一人であった。三二年後の一九六四年一月、わたしにとって初めてのガラパゴス渡航の直前に同アカデミーを訪ね、当時七一歳の朝枝と面談し、写真を撮らせてもらった。クロッカー探検隊のなかで朝枝は、写真と水彩スケッチの技術者であった。当時、カラー写真はなく、水彩スケッチが変色前の採集品、特に海産のエビ・カニ類の色彩を記録する手段であった。また写真技師としては黒白フィルムでの撮影だけでなく、フィルムの現像液や定着液を調合し、撮影済みフィルムの現像を現場で仕上げなければならなかったはずである。黒白写真約五〇〇枚が残されているから、大変な作業だったであろう。

朝枝の写真記録で、今なお意義を失わずとりわけ意味深いもののひとつが、サンタ・クルス島の最高峰へ初登行した際の記録である。サンタ・クルス島は、現在ではガラパゴスでもっとも開発が進み人口の多い島で、国際NGOチャールズ・ダーウィン研究所も国立公園管理局もここに置かれているが、一九三二年のクロッカー探検のころは入植ごく初期で、内陸はほとんど手付かずの原始境だった。そのなかをクロッカー探検隊は未踏峰の最高海抜地を目指して登っていった。一行のなかには、植物担当の探検隊員ジョン・トーマス・ハウエルもいた。

カリフォルニア科学アカデミーの前に立つ朝枝（筆者撮影、1964年1月）


朝枝による自筆の日記。左頁には行程が書き込まれている（本館所蔵）

クロッカー山の山頂から南東方向を写した写真2枚
左：1932年5月、朝枝が写した写真（X0076094）
右：1970年4月、筆者が写した写真（gallery.lb.nagasaki-u.ac.jp/galapagos/jp/の画像No.598）
左写真の中央、右写真の中央左の白いところはミズゴケ湿原。写真を照合する際の目印となった

**赤道下の登山**

ハウエルの文章記録「赤道下を登る」と朝枝の写真記録には、山地上部にミコニア低木群落があり、海抜約五一八メートル以高はワラビの草原が続き、最高地点に至る道程をよく記録している。当時、サンタ・クルス島の山地には未だ名前がなかった。クロッカー探検隊は五月九日に初登頂し、サンタ・クルス島の最高峰はクロッカー山と名付けられた。一行が島の最高地点に到達したことを証明しているのは、朝枝が山頂から南東方向を写した写真であろう。この朝枝の写真と、一九七〇年四月にわたしが写した写真をここに掲げる。

わたしは一九七〇年、二度目のガラパゴス渡航からの帰り路、サンフランシスコにある同アカデミーに立ち寄った。朝枝はすでに退職し一九六八年に死去していた。ハウエルさんにお会いして、クロッカー探検関連の文献を頂き、クロッカー山初登頂や朝枝の話など当時の模様もいろいろと聞いた。

そのときの話題を世界で初めてここに記録しておく。ハウエルさんは言った。「登頂者全員の氏名を紙片に書き、それをガラス瓶に入れ、最高地点の土のなかに埋めた。それが再発見されたとは未だ聞かない。確かめてほしい」。この一節は本稿の本筋からは脱線した話だが、記録しておきたい。

**動植物名に残るクロッカー探検隊**

クロッカー探検隊の活動はサンタ・クルス島最高峰に新地名クロッカー山を残しただけでなく、探検期間中に新発見したキク科木本（もくほん）の新種はスカレシア・クロッケリ（*Scalesia crockeri*）と名付けられ、探検ヨット・ザカ号はウチワサボテンの新変種ザッカナ（*Opuntia echios* var. *zacana*）に名を残す。なお朝枝の名は、帰路メキシコ沿岸で発見された新種ヒラメの学名モノレン・アサエダイ（*Monolene asaedai*）に残されている。

朝枝の水彩スケッチとは、海産生物の標本を海から採取した直後、変色する前に生体そのままの彩色で描いたものであった。同アカデミーは、変色前の魚類や甲殻類（エビやカニ）を描いた朝枝のスケッチ三〇〇点超を蔵している。

植物標本を作成中のハウエル（X0076058、サンタ・クルス島、1932年）

# フロレアナ島のドイツ人
## ――ガラパゴス事件をめぐって

新木 秀和
神奈川大学教授

### 移住者との出会い

ガラパゴス諸島には人間の歴史が刻まれている。一七～一八世紀に海賊船や捕鯨船が出没したあと、一九世紀以降は、学術探検隊と前後して開拓者や移住者がやって来た。朝枝利男はそんな人間たちの姿を記録した。フロレアナ島に目を向けると、一九三二年五月一五日の写真には、海賊や囚人の洞窟、ドイツ人医師フリードリッヒ・リターの小屋が写っている。彼と連れ合いのドール・シュトラウヒの二人が、クロッカー調査隊のボートに乗船した写真もある。朝枝は彼らのことをヌーディストとメモに書き残しているが、当時、その様子がセンセーショナルに報道されたからであろう。二人が家屋でくつろぐ場面や作業をする場面も興味深い。メモには、菜食主義者で片言の英語を話し、中国文学を話題にしたとある。囲いで野牛や野豚の侵入を防いでいること、一〇〇年前のダーウィン訪問時は流刑島だったが、当時、流刑者は誰も残っていなかったことも忘れずにしるしている。

フリードリッヒとドールが暮らしていた家屋（X0076104、フロレアナ島、1932年）

### ガラパゴス事件とは

一九三〇年前後に到来した三組のドイツ人たち。彼らをめぐる「ガラパゴス事件」は、ジョン・トレハンの『ガラパゴスの怪奇な事件』（一九八三年）に詳しい。一九二九年に、互いの配偶者を残してベルリンからやって来た前述のフリードリッヒとドールの逃避行は、「フロレアナ島のアダムとイブ」という新聞記事で書き立てられた。移住のきっかけはウィリアム・ビーブの『ガラパゴス――世界の果て』（一九二四年）だった。朝枝訪問より三カ月後の八月にはウィットマー一家が到着。堅実な家族で長年住み続け、その子孫は現在もホテルを経営している。翌一九三三年に姿をあらわしたのは、バロネス（男爵夫人）とよばれた個性的な女性と取巻き男性二人で、他の家族とのあいだに波乱をもたらした。これら三組の人間ドラマは一連の奇怪な事件につながった。フリードリッヒが中毒死し、バロネスと取巻き一人は失踪、もう一人はマルチェナ島でミイラ化した姿で発見された。ドールはやがて島を後にする。

事件を記録した訪問者の一人は米国の大富豪アラン・ハンコックである。探検船で島を訪れ、ドイツ人の姿を多くの写真や映像に残した。謎めいたこの出来事は「ガラパゴス事件――サタンがエデンにやって来た」（二〇一三年）というドキュメンタリー作品を生み出した。

自宅でくつろぐフリードリッヒ（左）とドール（X0076121、フロレアナ島、1932年）

クロッカー調査隊のボートに乗ったドール（左端）とフリードリッヒ（左から2番目）（X0076118、フロレアナ島、1932年）

### 島の秘められた歴史

荒涼とした絶海の孤島ながら泉があり、果物や野菜の栽培や家畜の飼育もできるため、フロレアナ島はさまざまな冒険者や移住者を引き寄せては、はねつけてきた。一九世紀になると、独立直後のエクアドル政府が諸島の領有を宣言し、開発の歴史が始まる。朝枝の訪問より一世紀前の一八三二年にビリャミール将軍が開拓に着手するが失敗。囚人の流刑地になっていた。ダーウィンはその情景を『ビーグル号航海記』（一八三九年）にしるしている。ドイツ人の到来以前、一九二六年にはノルウェー人の集団が入植地を築くものの、撤退を余儀なくされた。現在、二万五〇〇〇人以上の住民が暮らすガラパゴス諸島。一九三三年にはフロレアナ島に九人（三組のドイツ人）、サンタ・クルス島に一一人、イサベラ島に一八〇人、サンクリストバル島に三三五人の計五三五人が暮らしていた。それら四島には現在も、大陸からの移住者や欧米人の足跡が色濃く残っている（フロレアナ島の住民は今も一〇〇人足らずである）。

### 朝枝のレンズがとらえた人間

朝枝は一九三二年四月二七日にイサベラ島を訪れて、プエルト・ビリャミールが唯一の入植地であり、近くに約一五〇人が住むとメモにしるした。同年五月九日にはサンタ・クルス島の高地でバナナ農園を営むデンマーク人の家に一泊した。また一九三五年にも諸島を訪問し、三月二四日にサンタ・クルス島のアカデミー湾でエクアドル人男性のスナップをカメラに収めている。

島々を転々とした朝枝は、多くの島民と接したはずだが、人の姿はあまり記録していない。それでも、一九一八年の野口英世に次いでエクアドルを訪れた日本人として、事件前のドイツ人の生きざまや人間社会の一コマを活写している。

ランニング姿のエクアドル人男性（X0078238、サンタ・クルス島アカデミー湾、1935年）

# 朝枝利男とテンプルトン・クロッカー
## ――芸術と科学の旅

ピーター・J・マシウス
民博 超域フィールド科学研究部

世界を見つめるとき、何をどのように見るか、そこにはさまざまな方法がある。しかし、今日、多くの学者たちはひとつの学術領域に専念し、蛸壺的な専門領域のなかで暮らす。朝枝利男は日本の大学で学んだが、そのような学者としての暮らしに別れを告げた。彼は広々とした空間、そして自然界に惹かれていた。そのことは、彼が日本にいたころから明らかであった。そして、彼は芸術家としての才能と科学者としての好奇心をもって、生涯を通じて彼の興味のおもむくに従った。

フロレアナ島ブラックビーチに停泊するザカ号（X0076125、1932年）

朝枝がなぜ日本を離れたのかは知らない。しかし、アメリカに渡った彼は、写真家になり、剥製を製造する会社で働き、カリフォルニア科学アカデミーに勤務し、芸術を学び、大学の地質学部の技術者となり、太平洋での学術探検航海に加わり、そしてサンフランシスコの中心地で写真家として家業を立ち上げた。また、彼は第二次世界大戦中、ほかの日本人と同様に強制収容所に拘束された。戦前、自由市民として最大限の自由を満喫したのはザカ号での探検に加わったときであったろう。

**探検における朝枝の役割**

一九三二年から三八年におこなわれた一連の探検には、サンフランシスコの富豪テンプルトン・クロッカーの資金援助により、多くの科学者が参加した。個人的な冒険のために大海を航行する巨大なヨットを建造したクロッカーは、太平洋の学術調査への資金援助を熱心におこなうようになり、ついには、快適な航行となるよう気を配る実質的な主催者として探検に参加した。そしてときには、さまざまな種類の標本を収集し保存する科学者に、まるで甲板員のように手を貸した。

朝枝により製作され背景を添えられたゴリラの剥製。今日もカリフォルニア科学アカデミーに展示されている。写真は朝枝自身が撮影したもの（X0081773）

クロッカーはまた、鋭い観察眼をもった記録者でもあった。彼のヨット、その航路、おこなわれた活動、出会った人びとについて細かく記録し、その日記に基づいて『ザカ号の航海』（一九三三年）を出版した。日記は現在カリフォルニア科学アカデミーに収蔵されている。そして、この本には朝枝が撮影した写真が使われている。

カリフォルニア科学アカデミーに勤務していた朝枝は、一九三〇年にはじめて探検に参加することを認められた。これはクロッカーの支援による探検がはじまる以前のことであった。それ以来、さまざまな科学者によるチームが探検に挑んだが、厚く信頼されていた朝枝は常にそのメンバーの一人であった。彼の役割は幅広い。海陸から標本を採集する、色彩を正確に記録するために新鮮なうちに魚類の絵を描く、標本を保存するための作業をする、魚類、鳥類、探検隊のメンバーやガラパゴスから西太平洋に至る島々で出会った人びとの白黒写真を撮影する。クロッカーの日記では、朝枝の実践的な技術、そして絶え間ない作業が繰り返し賞賛されている。

朝枝自身は航海中、書きものをするための時間をもてなかったが、科学的な描画と写真撮影により充分な記録を残した。彼自身が科学的な論文の執筆者となることはほとんどなかったが、彼の描いた絵、撮影した写真は多くの出版物に使われた。自然を描写する芸術家・科学者である朝枝にとって、執筆者とならなかったことに何ら後悔の念はなかったのではないかと思われる。彼の描いたすべての絵には彼の署名が見られる。そして、これらを通じて彼は自由に自分自身を表現しえたのではなかろうか。

探検隊の隊長クロッカー
（X0076139、フロレアナ島ブラックビーチ、1932年）

**クロッカーの芸術的感性**

クロッカーは芸術に対して、航海や自然科学と同様に興味を抱いていた。裕福な実業家の一家に生まれたクロッカーにとって、実業の世界は興味深いものとはならなかったようだ。彼の資産は受け継がれたが、彼は自分の興味のおもむくままに生きた。クロッカーを動かしたのは自然界の美であり、人びとの暮らしや芸術のなかにある美と多様性であった。サンフランシスコで建造された彼のヨットは、世界的な経済恐慌で緊縮財政下にあった一九三〇年代、大海を航行する目的で造られたヨットのなかでもっとも美しいものであった。ヨットには、乗員、乗客、収集品のための充分なスペースがあった。探検航海を続けるうち、クロッカーは民族学的な品々の収集家になった。その多くは、今日、博物館の収蔵品となり、またあるいは彼個人のコレクションとなった。

わたしと、同僚の丹羽典生はサンフランシスコを訪れ、カリフォルニア科学アカデミーの紹介でクロッカーのきょうだいの孫娘に会う機会をえた。彼女の家は、朝枝が暮らした市の古い中心地にほど近いところにあった。

彼女は、実業に関心を寄せる一族に顔をしかめて見せた大おじの芸術的感性をたいへん尊敬している。ある意味で著名で、またある意味で無名の大おじが残した探検の写真、そして有名なフランスのメーカーによる一九二〇年代のアールデコ調の時計（ザカ号に搭載されていた）を、彼女は保管していた。写真や時計を目の前にして彼女と話していると、まるで時が止まったかのような錯覚を覚え、クロッカーのみならず彼とはるか太平洋で何カ月も過ごした朝枝がすぐそこにいるように思えた。

クロッカーがザカ号で使用していた時計
（筆者撮影、2019年）

急な坂道と古い木造家屋のある歴史的景観が抱えている今日的な問題に思いをはせながら、ホテルへと戻った。サンフランシスコの通りには街路樹としてニュージーランド・ポフトゥカワ（**New Zealand pohutukawa**、学名：***Metrosideros excelsa***）が植わっていた。わたしの故郷からこの地に移入された樹木が、サンフランシスコは環太平洋の一部であるということを印象づけた。東京から太平洋を渡りこの地に至り、人生の多くをここで過ごした朝枝も、彼の故郷とこの地のつながりを感じていたことであろう。

（翻訳・田渕悦子）

○○してみました世界のフィールド

# ロープウエーで天空の街をめぐる

吉江（よしえ） 貴文（たかふみ）
広島市立大学准教授

南米最大の銀山ポトシの坑道ツアーに向かう筆者。ポトシは 1545 年に現ボリビア領で発見され、のちにスペイン帝国に莫大な富をもたらした。手にしているのは鉱夫が採掘のために使うダイナマイトと信管（2007 年）

日本の都市で一般的な交通手段といえば、地下鉄やバスなどであろう。しかし南米のボリビアでは街の上空をロープウエーが走る。ロープウエーが日常的な交通手段になるとは、どのような感じなのだろうか。

★ボリビア ラパス

## 空を飛ぶ夢

むかしよく、空を飛ぶ夢を見た。道を歩いていると、急に体が軽くなる。気がつくと地面から体が浮かび上がっており、空中を漂いながら下界の街並みを眺めている。そんな夢である。特に大学院生のころに見た記憶がある。以前読んだ精神分析の本によると、空を飛ぶ夢は抑圧された心理状態からの解放願望をあらわすのだそうだ。将来も定まらず、ストレスにさらされていた院生時代の不安な気持ちをそんな夢が映し出していたのかもしれない。そういわれると、空を飛ぶ夢を見たあとは、どことなく心がすっきりとして、解放されたような気分を味わえた気がする。就職してからはそんな夢を見ることもなくなっていたのだが、最近になって、ふと思い出す機会に出くわした。わたしが人類学的調査のため二五年間通っている街、ラパスの上空を走る都市型ロープウエー・システム、「ミ・テレフェリコ」に乗ったときのことである。

オレンジ・ラインとラパス市街地。ゴンドラの屋根には太陽光パネルがついている（2019 年）

## 天空の街のロープウエー

天空の街、ラパス。南米の小国ボリビアの事実上の首都。アンデス山脈の東斜面、標高四〇〇〇メートルから三二〇〇メートルにかけてすり鉢状に広がる坂の街である。市庁舎のある旧市街地で標高三六〇〇メートルぐらい。ちょうど富士山の九合目あたりと同じ高さになる。そんな高地都市ラパスのあらたな交通手段として、今から六年前に登場したのがミ・テレフェリコである。ちなみにミ・テレフェリコとは、スペイン語で「わたしのロープウエー」を意味する。二〇一四年の開業当初、街の中心地であるセントロと周辺地区を結ぶ三路線一〇キロでスタートしたミ・テレフェリコは、今では一〇路線三〇キロにまで拡張され、市街地のほぼ全域をカバーする環状路線として、毎日朝六時から夜一一時まで休みなく運行されている。乗車料金は一路線につき三ボリビアーノス（五〇円弱）。地上を走るミニバスよりは少し高めだが、いつも交通渋滞に悩まされる陸路より、はるかに快適に市内を移動することができる。

## ゴンドラに揺られて空中散歩

ミ・テレフェリコは「都市型」のロープウエー・システムである。だからそれに乗ると、ラパス市街のまっただなかをゴンドラに揺られながら移動することになる。ゴンドラの進むスピードはおよそ時速一五キロ。眼下にはパセーニョ（ラパス市民）たちの暮らしが広がっている。自宅のパティオ（中庭）で洗濯をしているセニョーラ。建設中のビルの屋上で赤土レンガを運んでいる男たち。色とりどりの野菜や果物を地面に並べている定期市のチョリータ（先住民系の女性）。そんなとき、わたしの脳裏には「空を飛ぶ夢」の記憶が、デジャブのごとく蘇（よみがえ）る。きっと空飛ぶ自転車に跨（また）がって大空を散策したら、こんな感じにちがいない。かと思えば、標高四〇九五メートルにある七月一六日駅と展望台駅を結ぶシルバー・ラインのゴンドラからは、白雪を抱いた六〇〇〇メートル級の中央アンデスの山並みと、ラパス盆地のすり鉢の底に居並ぶ近代的なビル群との壮大な空間のコントラストを一望することもできる。

## そして夢から覚める

そんなラパスの絶景を求めてか、最近では外国人観光客のあいだでもミ・テレフェリコに乗るのがちょっとしたブームになっている。そのためのガイドツアーもあるらしい。かりに一〇路線すべてを乗り継いでも、運賃は三〇ボリビアーノス（五〇〇円弱）。世界に類を見ない、標高四〇〇〇メートルの空中散歩を楽しめる体験ツアーの料金としては格安かもしれない。ただ、空の上からラパスの街並みを眺められるということは、見られる側の住民からすれば大変迷惑な話でもある。じっさい、自宅近くにミ・テレフェリコの駅ができてしまったために急遽（きゅうきょ）、別の地区への引っ越しを決めた一家の話や、路線価の急落により、予定していた家屋の売却を諦めてしまった地主の話など、ミ・テレフェリコにまつわる噂話（うわさばなし）もちらほら耳に入ってくる。わたしにとっては「空を飛ぶ夢」を正夢に変えてくれた夢の乗り物だが、そんな話を聞くと、いつまでも夢ばかり見ているわけにはいかないような気もしてくる。

標高差 400 メートルをかけ上るイエロー・ライン（上）とミニバス の真上を走るホワイト・ライン（下）（ともに 2019 年）

# みんぱく Information

**特別展**
**「先住民の宝」**

世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか？　「宝」にこめられた思いとは何なのか？　本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

会期　3月19日(木)～6月2日(火)
会場　特別展示館

銅板紋章 Gerry Marks作／ハイダ(カナダ)

**コレクション展示**
**「朝枝利男の見たガラパゴス**
**――1930年代の博物学調査と展示」**

アメリカの学芸員で写真家の朝枝利男が1930年代に撮影したガラパゴスの風景について、彼の描いた美しい魚の水彩画とともに紹介します。

会期　3月24日(火)まで
会場　本館企画展示場内

ガラパゴスでパイプをふかす朝枝利男

**みんぱく映画会**
**「廻り神楽」**

岩手県三陸海岸を舞台に、340年以上にわたり、毎年、巡業の旅をする黒森神楽。大津波を生き抜いた神楽と、その地に暮らす人びとの力強さを描いたドキュメンタリーです。

日時　2月11日(火・祝)
　　13時30分～16時(開場13時)
会場　本館講堂(定員450名)
司会　林勲男(本館 教授)
トークセッション
　遠藤協(共同監督／プロデューサー)
　神田より子(敬和学園大学 名誉教授)
※申込不要、要展示観覧券
※参加券を11時からインフォメーション前(本館1階)にて配布します。

亡き人を供養する神楽念仏
© ヴィジュアルフォークロア

**みんぱく映画会・みんぱく映像民族誌シアター**

本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者によるトークをおこないます。

会場　淀川文化創造館 シアターセブン
　　(定員各回60名、当日先着順)
※申込不要、参加無料

**「フィリピン周縁地域の音楽」**

日時　2月8日(土)13時30分～16時
　　(開場13時)
司会　福岡正太(本館 准教授)
解説　米野みちよ(東京大学 准教授)
　　寺田吉孝(本館 教授)

**「民俗芸能と軽業」**

日時　2月22日(土)13時30分～16時
　　(開場13時)
司会　福岡正太(本館 准教授)
解説　笹原亮二(本館 教授)

**研究公演**
**「絆――人をつなぐ太鼓」**

本公演で演奏する「和太鼓 絆」は、人権意識を高めることや反差別を目的として活動しています。太鼓の響きや打ち手の姿が伝える何かを全身で体験してみてください。

日時　3月20日(金・祝)
　　14時～16時30分(開場13時20分)
会場　本館講堂(定員450名)
出演　和太鼓 絆
司会　寺田吉孝(本館 教授)
※要事前申込、要展示観覧券

**点字体験ワークショップ**

目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション！　点字体験ワークショップを開催します。

日時　2月8日(土)12時～15時30分
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料
※みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)による催しです。

**公開講演会**
**「ふたつの文化を生きる――ドイツのトルコ系移民から私たちのこれからを考える」**

本講演会では、多文化的な社会とはどういうものか、ドイツのトルコ系移民に焦点をあてて、人びとがどのように生きているのか描き出す。ヨーロッパの経験を参照し、日本での多民族・多文化共存について考える。

日時　2月28日(金)18時30分～20時45分
　　(17時30分開場)
講演会場　オーバルホール(定員420名)
　　(大阪市北区梅田3－4－5)
　　東京サテライト会場(ライブ配信)
　　聖心女子大学4号館／
　　聖心グローバルプラザ3階
　　ブリット記念ホール
　　(東京都渋谷区広尾4－2－24)
講演　森明子(本館 教授)
　　石川真作(東北学院大学 教授)
パネルディスカッション
　参加者　森明子(本館 教授)
　　石川真作(東北学院大学 教授)
　　高谷幸(大阪大学大学院 准教授)
司会　相島葉月(本館 准教授)
主催　国立民族学博物館、毎日新聞社
協力　聖心女子大学
※要事前申込(オーバルホールのみ)、
　参加無料、先着順、手話通訳あり

**お問い合わせ先**
研究協力課 研究協力係
06・6878・8209

**※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。**
**※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。**

お問い合わせ(本館 広報係)
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401
http://www.minpaku.ac.jp/



**みんぱくゼミナール**

日時　2月15日(土)13時30分～15時(開場13時)
会場　本館講堂
※申込不要、参加無料

第500回
**文明の転換点におけるミュージアム**
**――みんぱくのこれまでとこれから**

講師　吉田憲司
　　(本館 館長)

人類の文明は、現在、大きな転換点を迎えています。人類学と博物館、そしてみんぱくが、これまでの動きを踏まえて、今、どのような地点に立ち、これから、どのような方向へ向かおうとしているのかをお話しします。

施設の規模で、みんぱくは世界最大の民族学博物館となっている

**みんぱくウィークエンド・サロン**
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

2月16日(日)14時30分～15時　本館第7セミナー室
**バリ島トゥンガナン暦**
**100年分のカレンダーをつくる**
話者　山本泰則(本館 准教授)
※申込不要、参加無料

2月23日(日・祝)14時30分～15時15分
本館ナビひろば、第1収蔵庫前のコーナー
**収蔵庫を窓からのぞいてみよう**
話者　園田直子(本館 教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

## 刊行物紹介

■大丸 弘、高橋 晴子 著
**『新聞連載小説の挿絵でみる近代日本の身装文化』**
**三元社　10,000円(税別)**

日本人の身装〔身体と装い〕の変容を、近代の新聞連載小説挿絵から読み解いていく。服装・髪型・しぐさなどに加えて、人々をとりまく環境、情景、美意識まで、日常のありさまの移り変わりを絵で見て体験できる大著。

■石森 大知、丹羽 典生 編著
**『太平洋諸島の歴史を知るための60章――日本とのかかわり』**
**明石書店　2,000円(税別)**

日本の歴史を考える際には、太平洋に浮かぶ島国の1つであることを忘れてはならない。古代から現代まで、日本と太平洋の島々がお互いに影響を与えあいながら歩んできた道程を太平洋諸島の側から描き出し、新たな視点から歴史を見つめ直すことを目指す意欲作。

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く） FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

# 友の会

**友の会講演会**

会場　本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円

第498回　3月7日(土)13時30分～14時40分
**災害を伝える**
講師　林勲男(本館 教授)

2020年1月17日で、阪神・淡路大震災から25年となります。この間だけでも、国内外で多くの災害が発生し、そのたびに体験や教訓を伝えていくことの大切さが叫ばれてきました。1月末に神戸で開催される「世界災害語り継ぎフォーラム」のお話をまじえながら、「災害を伝える」ことについて、そのさまざまな試みや課題について考えてみましょう。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

第499回　4月4日(土)13時30分～14時40分
**【特別展「先住民の宝」関連】**
**トーテムポール――カナダ北西海岸先住民の宝**
講師　岸上伸啓(人間文化研究機構理事・本館 教授)

北アメリカ北西海岸地域にある先住民の村々には、動物や人間などの姿を彫りこんだ巨大な木柱が、多数立てられています。それらはトーテムポールとよばれ、現在、ハイダやクワクワカワクゥなど各民族の宝であり、象徴です。トーテムポールとは何か、その歴史的変遷、現在の制作状況とそれに関連するポトラッチ儀礼について解説します。また1972年、そして2020年に立てられる、みんぱくの新旧2本のトーテムポールの制作についても紹介します。

※講演会終了後、特別展の見学会をおこないます(40分／要会員証もしくは展示観覧券)。

5月の友の会講演会は、第500回の開催を記念して、吉田憲司館長と石毛直道第3代館長が対談します。詳細は次号でご案内します。
開催日：5月9日(土)
会場：本館講堂

想像界の生物相

# ウリヤンハイのシャマンの依り代

ハンガリー科学アカデミー博士研究員　ショムファイ・ダーヴィド

資料名｜依り代（獣）
標本番号｜H0205486
地域｜モンゴル
サイズ｜縦 41cm ×横 21 cm

## ◆◆◆獣がついた儀礼道具◆◆◆

みんぱくが所蔵するシャマンに関連した資料のなかに、一九九七年に収集されたアリグ・ウリヤンハイのシャマンが使っていた依り代とおぼしき道具オンゴン（複数形オンゴド）がある。アリグ・ウリヤンハイとは、フブスグル湖の東に住む人口三〇〇〇人ほどのモンゴルの一部族で、テュルク語族の言語を話すトゥバ人の子孫とされる。

研究者によってはオンゴンという名称を、「祖霊」やその「偶像」の意味で使う場合もあるが、じつは「偶像」ではなく、「聖なる」あるいは、「霊に守られた」というような意味のことばである。本稿ではシャマンが使う聖なる「儀礼の道具」という意味で使う。

オンゴンはマンジルガとよばれるリボン状のもので装飾されているが、本館の中央・北アジア展示場に展示されている右の写真の資料では、そこに動物らしきものもぶらさがっている。わたしは、これはおそらく「ケル・ジュトパ」とテュルク系の人びとによばれる動物ではないかと考えている。西シベリアのバラバ・タタール人のシャマンの太鼓にも描かれることがあり、また、南シベリアのハカス人、アルタイ・キジ人、トゥバ人も同様のモチーフを描く。これに似たオンゴンを、アルタイのテレンギット人が使っている写真も残っている。

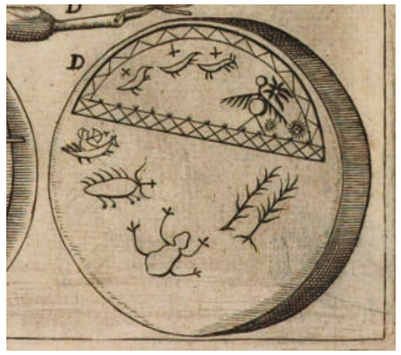
## ◆◆◆地下世界の妖獣◆◆◆

南シベリアのテュルク系民族の民話には、ケル・ジュトパという妖獣や、ケル・バリクという妖魚が登場し、それは足のあるクジラのような生きものとされる。地下世界に棲み、その背に人間が住む「真ん中の世界」を担いでいる。二匹いるともいわれる。そして、この獣が動くと地震が起こるとされる。このような南シベリアの伝承が、ウリヤンハイのシャマンの儀礼とも関連しているのであろう。

蛇、鳥、怪物などの神秘的な生きものは、シャマンが天上世界と地下世界を行きかう旅の行程の象徴とされる。それを示す西シベリアのバラバ草原で収集されたシャマンの太鼓を見てみよう。一八世紀前半にピョートル大帝の許可を得てシベリアの調査をした、ドイツ人医師のダニエル・ゴットリーブ・メッサーシュミットによって収集されたもので、一緒に調査をしたスウェーデン人の軍人フォン・シュトラーレンベルクが後にまとめた報告書にその絵が載っている。天上世界と地下世界をつなぐ聖なる木があり、天空をあらわす上部には「三頭の鹿」の星座（オリオン座）が描かれている。そして地下世界には聖なるカエルのほか、不思議な生きものが描かれている。この生きものがケル・ジュトパであることを、ハンガリーの研究者ディオーセギ・ヴィルモシュがつきとめている。これは、ウリヤンハイのシャマンの儀礼が、テュルク系の伝承とつながっていることを示す証拠でもある。

このように、一九世紀以降にモンゴル語族の言語を話すようになった民族でも、テュルク系、ツングース系のルーツをもつ場合があるので、「モンゴルのシャマニズム」と一言でいっても、その歴史はじつに複雑なのである。

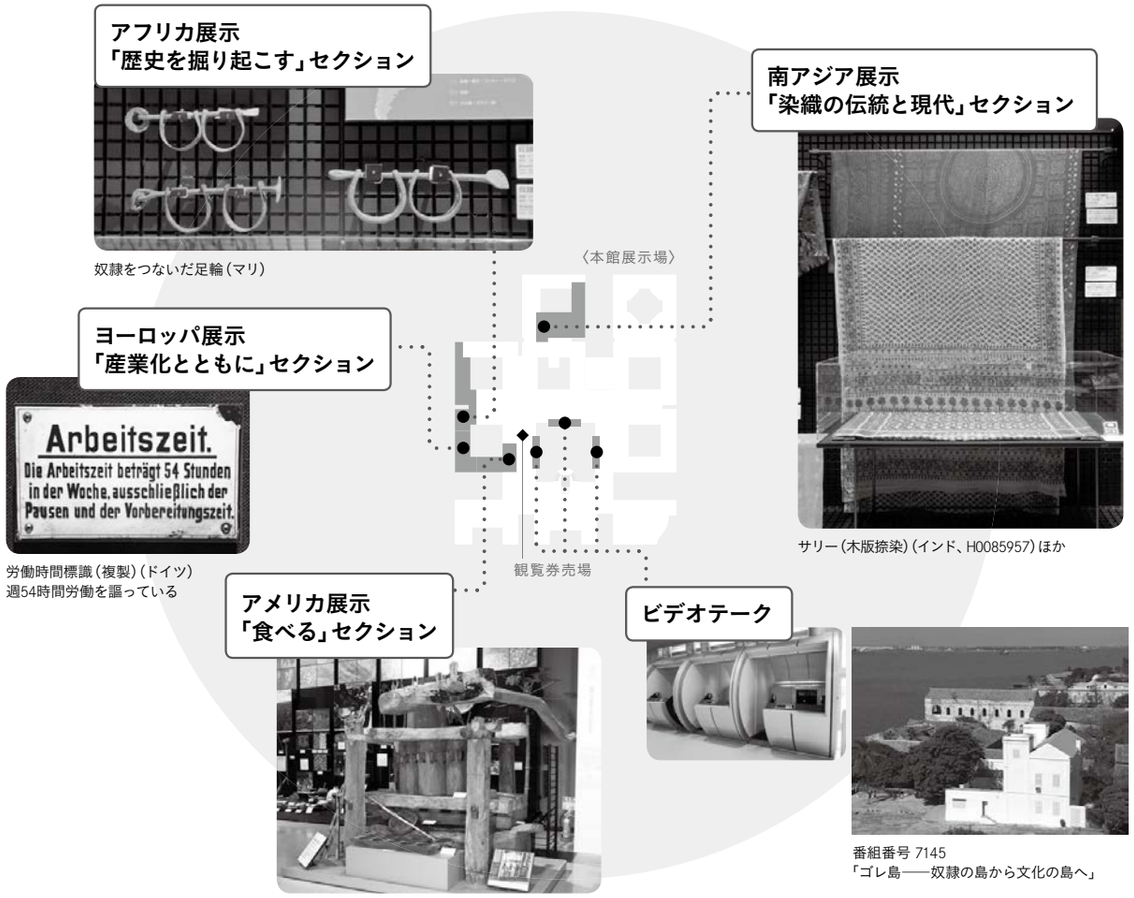
（翻訳・山中由里子）



西シベリアのシャマンの太鼓。カエルの左隣に描かれているのがケル・ジュトパ
出典：Philipp Johann von Strahlenberg（1730）, *Das Nord- und Ostliche Theil von Europa und Asia*, Tab VI.

# みんぱくで大西洋奴隷交易に触れる

民博 グローバル現象研究部　鈴木（すずき） 英明（ひであき）




歴史というのは、ある側面では物語である。History（歴史）という単語のなかにstory（物語）が隠されているのは偶然でも何でもない。物語とは出来事と出来事をつなげることでもある。モノとモノ、コトとコト、モノとコトがつながっていくことで物語としての歴史が浮かび上がってくる。今回は、そんな物語としての歴史を頭の片隅に置きながら、大西洋奴隷交易を手掛かりに展示場を回遊してみよう。

## 海を渡ったもの

スタートはアフリカ展示場。奴隷交易の展示がその一角にある。現在の研究の最前線では、サハラ以南アフリカから新大陸へと運ばれていった奴隷は一五〇〇年からの三七五年間でおおよそ一二五〇万人と推計されている。奴隷交易の拠点となった港のなかには、現在でも交通の拠点になっているところもあれば、廃れてしまったところもある。近年では、世界遺産に指定されるなど観光地となっているところもある。そんな奴隷の積み出し地の現在については、ビデオテークのなかに「ゴレ島――奴隷の島から文化の島へ」があるので、関心があれば視聴してみるのもいいだろう。

ところで、奴隷は何と交換されたのだろうか。一概に「これ」とはいえないが、重要なものとして、布とタカラガイがある。面白いのは、どちらもインド洋から運ばれてきたものが大きな役割を果たしていることだ。布は英仏蘭などの東インド会社がインドのおもに東海岸で購入したものが用いられた。インド産の布が高品質であることは現在でも広く知られている。南アジア展示場にはサリーなどが展示されているが、このようなインド産の布は喜望峰をぐるりと回って西アフリカにもってこられ、新大陸に運ばれる奴隷の購入に用いられていたということになる。特に藍染めの「ギネー」とよばれた布は西アフリカで好まれた。もうひとつのタカラガイは特にモルディブ産のものが歴史的に広く知られてきた。個体のばらつきが少ないという形態上の特性もあるが、近場で入手が難しい場合、タカラガイを貨幣として用いる社会は少なくなかった。西アフリカもそのひとつだったのだ。

## 商品作物と労働

さて、新大陸で奴隷は何に用いられていたのだろうか？　それは商品作物の生産と不可分である。商品作物とは、平たくいえば、売るための作物である。サトウキビはその代表格だ。砂糖だけ食べていたら体に良くないのは誰でもわかるだろう。ただ、砂糖は美味しい。だから、人は砂糖を求める。けれども、どこでも作ることができるわけではない。そんなわけで、サトウキビの栽培に適した地域で専門的に砂糖を生産する場所が生まれた。アメリカ展示場には、サトウキビの圧搾機が置かれている。目の前にすれば、この木製の巨大な機械を一人で操作することの困難さが予想できる。じつは製糖のために、サトウキビは搾ったそばからその搾り汁を煮詰める必要がある。そうでなければ発酵し、酒になってしまうのだ。それでいいじゃないかという読者もいるだろう。その気持ちはわかるが、それではダメなのだ。なぜならば、砂糖こそは産業革命期のヨーロッパにおいて、工場労働者たちの活力源だったからだ。

ヨーロッパ展示場に行ってみよう。産業革命の時代の労働者に関する展示がある。週五四時間労働！　時間に追われる労働者たちが手っ取り早く労働の活力を得んとして砂糖入りの紅茶を飲み干す。砂糖入りの紅茶は優雅にすするものではなく、ぐっと飲み干し仕事場へ向かう、労働者にとってはそういうものだった。

ところで、サトウキビは新大陸の原産ではない。原産地は東南アジアだとされ、いわゆるコロンブスの交換によって新大陸に定着していった。コロンブスの交換というのは、コロンブスの新大陸到達に代表される一五世紀後半以降の新大陸と旧大陸との交流の展開のなかで、それまでそれぞれになかったものが相互にもち込まれた現象を指す。では、どんなものが運ばれたのかといえば、やはりアメリカ展示場にいくつかの標本模型とともに説明がある。じつは旧大陸から新大陸に運ばれたもののなかには病原菌も含まれていて、免疫のない新大陸の人びとが病に倒れていくなか、免疫のあるアフリカ黒人が労働力として用いられるようになっていったのだ。

今回は大西洋奴隷交易を事例にしたが、きっかけは何でもいい。何か心をひく展示があれば、それがどのように世界とつながっているのかを探しながら展示場を回遊するのもみんぱくの楽しみ方のひとつだ。探究ひろばでヒントになる本を探すのもいいだろう。

アメリカ展示「食べる」セクション、「世界の食生活を変えた農作物」コーナー

シネ倶楽部

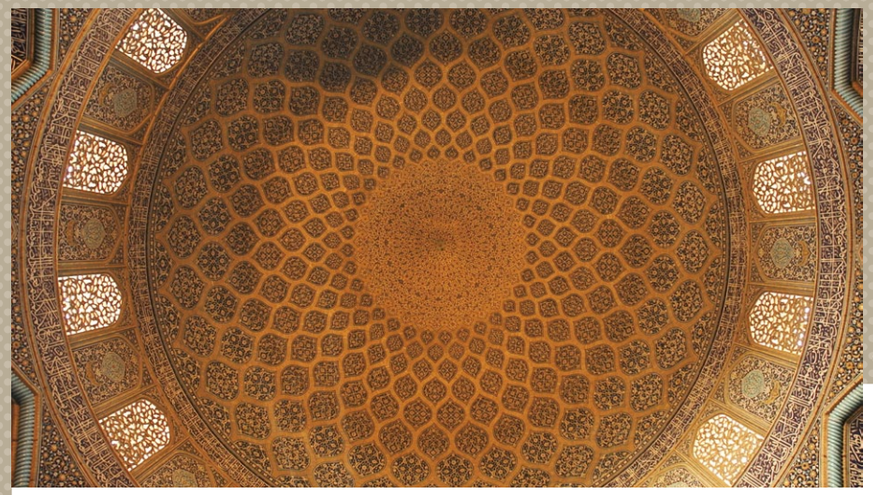
# 「シャルギー（東洋人）」

原題：شرقی

2018年／イラン／ペルシャ語・日本語・英語・トルコ語ほか／129分

監督：マスウード・ターヘリー

出演：サイイド・ホセイン・ナスル、森本公誠、若松英輔ほか



モスクのドームがくるくる回る
シーンがたくさんある
©Shargi

## 神の言葉に耳をすます

相島 葉月
民博 グローバル現象研究部

日本の人文学において、研究成果の国際発信が求められて久しい。しかし、英語やスペイン語で論文を出版したとしても、世界の第一線で活躍する研究者はほんの一握りだ。そういった意味で、イスラーム研究者、井筒俊彦（一九一四～一九九三）は極めて異例である。没後四半世紀が経過してもなお、彼の著作は、英語圏の大学においてクルアーン研究の古典として読まれている。わたしの専門はイスラーム思想だが、オクスフォード大学の博士課程在学中、指導教官に勧められて初めて井筒の著作を手にとった。Izutsu は、日本人の知らない、世界で有名な日本人なのである。

### 思想家の原像を追う

二〇一九年四月に京都、五月にオクスフォードで「シャルギー（東洋人）」の上映会を開催した。本作品は、イラン人映画監督マスウード・ターヘリーによる、井筒の生涯と思想の全貌に迫ったドキュメンタリーである。イラン人は海外渡航が制限されているにもかかわらず、ターヘリーは撮影クルーを引き連れ、井筒の知人や彼の業績に詳しい研究者にインタビューするために日本やトルコ、欧州、北米などの一二カ国を訪問した。禅の環境で育った井筒が外国語に興味をもち、アラビア語に魅了されてイスラーム研究を志した経緯、ファシズム運動家の大川周明との関係、カナダのマッギル大学とイラン王立哲学アカデミーでの活動、晩年鎌倉で過ごした日々などが、関係者へのインタビューや井筒の著作をもとに丁寧に再構成されている。わたしは井筒に対し「浮世離れした学者」というイメージをもっていたため、一九七九年のイラン・イスラーム革命の際に、宗教の力を肌で感じ興奮していたという証言は大変興味深かった。インタビューをスナップショットのように組み合わせた目まぐるしい映像と、画面からあふれそうな分量の字幕を追いながら、初見で作品の主題を理解するのが難しいほどに、情報量の多い作品である。

スイスのエラノス会議に参加した井筒　©Shargi

### 井筒と言語

本作品の中心的な主題のひとつは、井筒の言葉／コトバへのアプローチである。言葉を超えた真理を追究する禅の教えを大切にした父への反抗から、井筒は言語哲学に惹かれるようになる。一三歳で古典ギリシャ語を学び始めて以降、ほぼ独学で三〇におよぶ外国語を習得したという。複数の研究者が井筒の類いまれなる語学の才能について証言していることから、ターヘリーはいろいろな言語を自由に操るポリグロットとしての側面に惹かれているように思える。一方わたしは、神が預言者ムハンマドに啓示を託した瞬間を追体験したいという思いから、二一歳ごろにアラビア語を学び始め、ムハンマドの伝記を書き、聖典クルアーンを翻訳するに至ったという、井筒の知的好奇心に感服した。古代ギリシャからイスラーム、道教や仏教に「東洋思想」の原像を探求し続けた理由は、神と人との融合を目指す神秘主義思想に強く関心を寄せていたからではないだろうか。井筒がどこまでムハンマドの境地に近づけたのかが気になるところである。

井筒は一九五〇年代より英語で学術書を執筆するようになった。慶應義塾大学の常勤職にありながら、世界にはばたく準備を始めたのであろう。一九五九年には米ロックフェラー財団の支援を受けてエジプトに留学をした後、マッギル大学に奉職する。日本では外国語文献の入手が非常に困難であった時代に、言語学を援用した独自の方法論で、クルアーン研究に金字塔を打ちたてたのである。本作品が描く井筒の生涯は、日本はもちろんのこと、グローバルな知の流通の周縁に置かれた中東の研究者にとっては、まさに夢のようなサクセスストーリーである。

ターヘリーをオクスフォード上映会に招待したが、イギリスに入国するビザが下りず、直接会って製作の背景について尋ねることができなかった。知の求道者として自由に国境を行き来した井筒の姿は、彼の目にどう映ったのだろうか。監督が不在でも、データさえ届けば上映会は開催できる。人の移動を規制しても、作品の流通は止められないのである。民族誌映画や商業的なドキュメンタリーと一線を画した本作品が、できるだけ多くの人に届くことを切に願う。

井筒と親交があった東大寺長老、森本公誠　©Shargi

ことばの迷い道

# エジプトのIBM

末森 薫（すえもり かおる）
民博 機関研究員

紛糾した打合せの終わりであった。もち越しとなった検討事項について「明日こそは決めましょう」と語気を強めて伝えた。すると、エジプト人の同僚が「IBM」と応えた。自身のパソコンはF社のものであるし、その瞬間は何を言っているのかわからなかった。不可解な顔をしていると、エジプト人の同僚はにこやかに「Insha'allah Bokra Maalesh（インシャッラー・ボクラ・マーレシュ）」と呟いた。アラビア語は片言しかわからなかったが、よく耳にする単語の訳を頭のなかで並べた。神が望むなら、明日、ごめん。

アラビア語圏を訪れたら一度は耳にするであろう「インシャッラー」。唯一神・アッラーが望むのであればそうなるであろう、といった意味合いである。ポジティブにとらえれば「神に身を委ねる」ということになるが、自身の責任を問われない「神頼み」といった側面ももち合わせる。二〇一一年に起きたアラブの春の直後、組織を仕切る立場の人たちからこのことばを耳にする機会が増えた。若者や部下が自由に発言できる雰囲気のなか、責任を負う行動をなるべく避けようとする風潮が蔓延していたのである。

「ボクラ」は「明日」を意味する。退勤時のあいさつの他、予定していた事柄が片付かず、翌日にもち越すときなどにもよく耳にした。翌日に片付いたら上出来であり、その次の日、さらにその翌日、場合によっては翌週、翌月に事が先延ばしされることもしばしばあった。ボクラが明日に限らず、今日よりも先の未来を広く含んでいることに気づき始めたのはエジプトに着任して間もないころであった。一方、普段は先延ばしにしがちなエジプトの同僚であったが、期日が間近に迫ったときのボクラは信用できた。準備不足で開催が危ぶまれていたシンポジウムも、当日になると不思議と体制が整っていた。追い込まれたときの彼らの爆発力は凄まじい。

「マーレシュ」は、「ごめん」「気にしないで」「お気の毒」「残念」といった謝罪や同情を示す便利なことばである。ただし、謝罪の場ではその使用に注意が必要なときがある。ややフランクな表現であるためか、本気で謝罪していないと誤解を招いてしまう場合もあった。伝え方の問題の方が大きいかもしれないが。

エジプトのIBMは「神に（責任を）委ねてみましょう。そうしたら明日（あるいは明日以降の将来）にはなんとかなるかもしれません。ただ、そうならなくても気にしないでね」といくつもの予防線が張られた寛大な略語なのである。日本で使用したならば呆れられるか、激怒されるかもしれない。ただ、エジプトで暮らすうえで、エジプト人の気質が凝縮されたこの略語の深意を知ることは不可欠であった。紛糾した場の雰囲気も「IBM」で和らぎ、わたし自身もストレスをためず、少し余裕をもって構えることができたのである。ただし、物事の進展具合は相変わらずであったが……。

IBMをしるした土産物のマグネット
（撮影：鈴木淳）

月刊みんぱく 2020 2月号

## 編集後記

世のなかには、まだまだあまり知られていない凄い日本人がいるものだ。特集で取りあげた朝枝利男と「シネ倶楽部M」で紹介された井筒俊彦がおこなってきたことを読んでの率直な感想だ。明治と大正生まれと、両者には約30年の時代差がある。だが、2人に共通するのはその道を極めたパイオニアとしての類い稀(まれ)な博学と行動力だろう。

ところで、わたしたちはなぜ凄い人ではなく、つい凄い日本人といってしまうのか。ノーベル賞の発表のときもそうだ。おそらくそこには、自分と同じような義務教育を受けた人が突出することへの驚きと賞賛があろう。外国人はさておき、日本人であれば似たり寄ったりの教育環境で育っているはずだという前提である。だが、それがそうでもないことは、井筒の早熟な言語習得の遍歴から明らかになる。まして新自由主義が台頭する現在、教育の格差が広がっていることは皆薄々気づいており、だからこそ身の丈などという正直な発言に心穏やかでいられなくなるのだろう。小学校から、やれ英語だ、プログラミングだとかまびすしいが、周りの自然界に惹(ひ)かれた朝枝、多言語を操ることに惹かれた井筒の学童期を思わず想像してしまう。（南真木人）

●表紙：ガラパゴスでパイプをふかす朝枝利男
（X0076115、フロレアナ島ブラックビーチ、1932年）

**次号の予告**

特集

**「先住民とアート」（仮）**

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

## 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

**維持会員・正会員**

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

**ミュージアム会員**

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

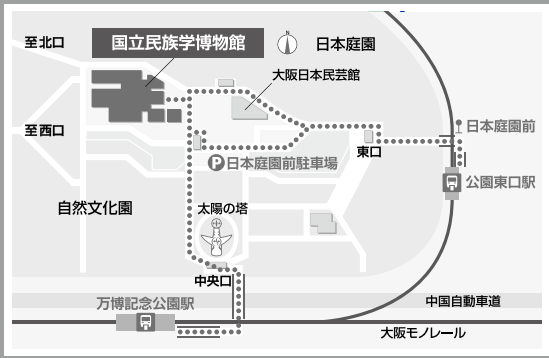
詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

月刊みんぱく 2020年2月号
第44巻第2号通巻第509号　2020年2月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。




交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

# みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

## みんぱくの特別展・コレクション展示を見に行こう！

開催中

コレクション展示

### 朝枝利男の見たガラパゴス
### ——1930年代の博物学調査と展示

1932年のガラパゴス諸島に足を踏み入れ記録した日本人がいました。本コレクション展示では、アメリカの学芸員で画家・写真家・剥製師でもあった朝枝利男がガラパゴスで撮影した写真を中心に彼のアルバム・日記・魚の水彩画について紹介します。是非、本号の特集とあわせてご覧ください。

会期　3月24日（火）まで
場所　本館企画展示場内

ガラパゴスペンギン

開催予告

特別展

### 先住民の宝

先住民とよばれる人びとは現在約3億7000万人、世界70カ国以上の国々に暮らしています。本特別展では、約740点におよぶ展示品と写真パネルや映像で、先住民の歴史や伝統的な暮らしを紹介するとともに、先住民運動など、現在彼らが抱える問題も解説します。本誌3月号で特別展関連の特集を掲載します。

会期　3月19日(木)～6月2日(火)
会場　特別展示館

◆1月25日発行の『季刊民族学』（171号）にも展示関連の記事が掲載されています！

国立民族学博物館友の会機関誌『季刊民族学』

### 特別展・コレクション展示 特集号

- 「アヌココロ　アイヌ　イコロマケンル——新国立博物館設立への道」佐々木史郎
- 特別展関連 特集「先住民のいま」
  池谷和信／久保正敏／庄司博史／立川陽仁／野林厚志／信田敏宏／本谷裕子／南真木人
- コレクション展示関連「朝枝利男の見たガラパゴス」丹羽典生

| | |
|---|---|
| 友の会会員価格 | 2,000円+税 |
| 一般価格 | 2,500円+税 |

◆『季刊民族学』についてのお問い合わせ先
国立民族学博物館友の会　電話　06-6877-8893（平日9:00～17:00）
ホームページ　https://www.senri-f.or.jp/category/journal/